

日本古典文学大辞典

第二卷



かきく

日本古典文学大辞典

第二卷

岩波書店

日本古典文学大辞典 第二卷 第二回配本(全六卷)

一九八四年一月二〇日 第一刷発行

定価 一三〇〇〇円

編集者 日本古典文学大辞典

編集委員 会

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋二-5-5

発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三(三三)五二四二
振替 東京六(三三)四〇

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© IWANAMI SHOTEN 1984
Printed in Japan

第二卷

かま—こ

釜淵双級巴たつじょうま 三巻。浄瑠璃。

並木宗輔作。角書「七条河原」。元文二年(享和七月二十一日豊竹座初演。大盗石川五右衛門を主人公とする浄瑠璃。先行作に「石川五右衛門」(松本治太夫正本)、「傾城吉岡染」(近松門左衛門作)があり、本曲以後の作に「石川五右衛門一代斬」(明和四年友江子・当証軒作)、「木下蔭狭間合戦」(寛政元年、二世若竹笛躬ら合作)がある。【梗概】上の巻―石川五右衛門は公家侍若木兵部の総領であるが、庚申の日に生まれ、親に捨てられて河州石川で成長し、百姓を嫌って盗人仲間に入る。美豆野の御牧で国守の若殿が放ったそれ矢を種に、非人の婆を使って五十両騙(むり)とった上、婆を殺す。また島原で田舎侍平の平々(へ)を殺して平々が請け出すはずの滝川をつれて立退く。中の巻―美豆野の若殿の傳役で若木兵部の養子若木当馬之丞は、五十両騙られたことから浪人となり、それと知らず、五右衛門の以前の妻おつと夫婦になつてゐる。当馬之丞は偶然に盗みに入つた五右衛門を捕えようとするが、父兵部の実子と聞き、真人間になれと諭して見逃す。五右衛門もおつとの間の子五郎市を引きとり、正業につこうとするが、仲間ひかれて盗賊をやめられない。今の妻お滝は継子五郎市を虐待する。お滝の養父で悪人の三二五郎兵衛(後の正本は小郎兵衛)はお滝をゆすり、五郎市は五郎兵衛を養母の不義の相手と誤解し、五郎兵衛を殺すつもりで、誤つてお滝を刺す。お滝は実は五郎市を盗人仲間に入れさせぬために、わざと辛く当たつたのだと打ち明けて死ぬ。五右衛門は五郎兵衛を殺し、親子とも親殺しの罪を犯す。下の巻―五右衛門は路用にするた

め親から譲られた刀を公家侍に売ろうとするが、その侍こそ父兵部であった。五右衛門と五郎市は捕えられ、七条河原へ引かれ、兵部やおつとが悲しむ中で、残酷な釜煎の刑を受けて死ぬ。【趣向】先行二作ではお家騒動を背景に、五右衛門を忠臣として、本作ではその面を切り捨て、五右衛門自体の家庭の悲劇に絞つた。中の巻「五右衛門住家」、下の巻「刀売」釜煎が名高い。なお「浄瑠璃譜」に本曲初演時に「釜煎五右衛門の人物段々色赤くなるやう数四番に作る」とある。【付記】歌舞伎にも移され、正伝節、新内・常磐津にも改曲された。春富士正伝の「春富士都錦」に「石川五右衛門継子の段」を所収。新内では「五右衛門住家」と釜煎を上、継子責(宮古路加賀太夫正本では「針の段」)、中「お滝殺し」、下「新釜煎」と三巻に分ける。常磐津も同様。【諸本】六行七十三丁本などがある。【翻刻】日本名著全集「浄瑠璃名作集・上」。帝國文庫「紀海音・並木宗輔浄瑠璃集」。なお、「春富士都錦」は日本歌謡集成10、新内は日本音曲全集「富本及新内全集」、常磐津は「常磐津集」に所収。〔内山美樹子〕

鎌倉大草紙かまくら 三巻。軍記。作者未詳。東常縁とうじょうえんの歌を十二首も収める

ところから、常縁の流れをくむ歌人かとする説(菅政友全集、雑稿四)がある。「鎌倉大草子」鎌倉大双帯とも。また「貞丈雑記」巻十六に「一名太平後記」とあり、内閣文庫蔵一本の識語に「一名太平後記、又号関東合戦記」とある。なお、別に内閣文庫蔵泰平後記(内題「太平後記」)がある。「太平記」の後をうけた軍記の謂か。成立年未詳。最終記事は文明十一年(一四七五)で、この年以

後、室町末期頃までには成つたとする説が有力。【内容】康暦元年(二三九)における鎌倉公方足利氏満の京都討伐計画と管領上杉憲春の諫死事件に始まり、文明十一年、太田道灌軍が千葉孝胤の臼井城を攻略したことに至るまで、百年間にわたる関東の戦乱・動静を記述したもの。氏満・満兼・持氏・成氏と四代にわたる鎌倉公方を中心に、公方足利家・執事上杉家の内紛や確執、小山・伊達による争乱などが主要な内容である。内閣文庫蔵の五本などは、善悪を弁別し、「勸懲や君臣之枢機」を後世読者に知らしめるために本書を著したとする序文を持つが、記述態度は倫理的というより史実を直叙しており、室町前期の関東の政治情勢を伝える数少ない史料である。また「太平記批判記」なる書を引いて、「太平記」に漏れた合戦の多いことを指摘したり、心永三十二年(四三三)小栗満重謀叛の折、その子小次郎が遊女照姫に助けられるという小栗判官伝説の原型を伝えたり、正徹・常縁・斎藤妙椿らの歌二十八首を載せるなど、文学史的にも注目すべき記事が多い。【諸本】内閣文庫(五種)・天理図書館(二種)などに三十余種の写本があり、巻の分け方・冊数も一定ではないが、大別して上下二巻本系統と上中下三巻本系統がある。二巻本(群書類従原本・内閣文庫蔵延宝七年書写本など)は、上巻が持氏による武田信長攻略と永享初年(四九)の甲斐情勢で終り、下巻が持氏の遺子成氏の鎌倉公方就任(文安六年一四四九)から始まっている。持氏が滅亡した永享の乱(永享十一年)や結城合戦(嘉吉元年一四二四)は、成氏の生い立ちに関連して触れているのみである。三巻本(内閣文庫蔵文化十

年書写本など)は、二巻本に結城合戦の顛末を中巻として挟んだもので、その本文は「関東合戦記」北条記(いずれも統群書類従21輯上所収)の結城合戦記事と一致し、「永享記も分捕首名以外は一致)、これらの書に拠つて補入された可能性が強い。永享の乱前後の記事は古くから欠けており、中巻とは別文の「持氏滅亡記」成氏沙汰(鎌倉大草紙脱漏)(我自刊我書・日本歴史文庫所収)も江戸初期頃までに編まれている。【翻刻】群書類従・合戦(中巻を別に付載)。日本歴史文庫11(二巻本)。改定史籍集覧5(三巻本)。【加美 宏】
【参考文献】黒川真頼「鎌倉大草紙考」黒川真頼全集4、明治43年。
鎌倉海道かまくら 二冊。俳諧。千梅編。享保十年(一七二五)刊。千那門の編者が、洒落風と化鳥風に二分された江戸俳壇に「蕉門」の法灯を挑げて鎌倉の大道を開くべく、師命によって発企した集であるが、編集半ばにして享保八年師を失い、追善の「報恩奠章」を記し、師の遺句を拾って後集を出すこと告している。同九年の佐角序・自序を付す。上冊は雪・月・花・郭公・菊・恋旅の七巻より成る句文集。下冊は四巻より成る四季発句集の前に「千梅林記」、後に「報恩奠章」と四歌仙を録する。芭蕉や千那関係の人々のほかに、江戸の洒落風連衆も入集している。【翻刻】近世俳諧資料集成2。〔白石悌三〕
鎌倉五山記かまくら 一冊。仏教。著者・成立年未詳。鎌倉五山の歴代の略歴・塔頭・没年月日・寮舎境地などについて記したのも。建長寺の項には開山蘭溪道隆以下四十

九人、円覚寺は無学祖元以下三十四人、寿福寺は明庵采西以下十五人、淨智寺は大休正念以下十二人、淨妙寺は退耕行勇以下五人の歴代について記し、京都及び鎌倉の五山の開山、関東の十刹、建長寺鐘銘、蘭溪道隆自贊などを付記。【諸本】写本にお茶の水図書館本(寛永十八年(一六四一)写)、内閣文庫本などがある。【翻刻】続群書類従27輯下。改定史籍集覽26。【今枝愛貞】

鎌倉三代記

浄瑠璃。紀海音作。正徳六年(一七〇二)正月大阪豊竹座初演。海音の代表作の一つ。【成立】初演年次については、『外題年鑑』は享保三年(一七二二)正月二日とするが、『鸚鵡籠中記』及び『今昔操年代記』の記述により、豊竹座の座主豊竹若夫が、上野少塚を受領した正徳五年の翌春とみなす。【義太夫年表・近世篇】の見解にしたがう。浮世草子『頼朝三代鎌倉記』(正徳二年)の影響下に成立。【梗概】源家の二代將軍源頼家は酒色に溺れ、忠臣の畠山重忠、和田義盛らを疎み、佞臣比企判官能員(能)を重用する。能員の養女若狭の局は、頼家の寵愛を一身に集め、若君一幡(若)を生むが、遊女出身ゆえに恥辱を受け、実父を比企判官のために殺され、実父と養父への義理の板挟みとなって自害する。頼家は若狭の局の亡霊に諷められ、先非を悔いて出家し、判官は謀反が露頭して忠臣に滅ぼされる。【諸本】七行七十九丁本、十二行二十五丁本などがある。【翻刻】紀海音全集4。

【十段】浄瑠璃。増補作者、千竹・鬼眼。安永十年(一七九一)三月二十七日江戸肥前座初演。角書は『源頼家源実朝』。【成立】明和六年(一七六九)末竹本座初演の『近江源氏先陣館』

の続編として、翌七年五月二十二日から、同座で『近江源氏太平頭整飾』(九段)が上演されたが、大阪落城を扱ひ、当局を刺激する部分があったため、六月十六日に上演を差し止められ、正本も刊行されずに終わった。この『太平頭整飾』の一部を改めた異本とみられるものに、『近江源氏先陣館』後太平金兜鍪(安永三年冬、作者近松半二・竹本三郎兵衛とある写本)、『佐々木高綱武勇日記』(安永七年二月一日京都竹本義太夫座で上演、写本伝存、作者不記)、『花飾』(天明元年(一八一一)二八月、読本浄瑠璃として刊行、作者不記)と、本作などが現存する。各本とも内容にはほぼ同じで人名や細部に異同があり、諸本中実質的にもつとも成立が遅く、かつ豊臣・徳川の対立抗争という主題をやや不鮮明にした『鎌倉三代記』が人形浄瑠璃・歌舞伎の舞台に定着した。【梗概】初段(京方(豊臣)の源頼家(秀頼)と鎌倉方(徳川)の源実朝・北条時政(家康)の和睦が整い、頼家の近臣三浦之助義村(木村長門守)は坂本城から使者として石山の陣の時政の許に向う。二段目(京方は和睦後も、鎌倉方に圧迫され、諸士の不満がつのる中で、頼家は酒に興じて政を怠り、佞臣がはびこる。佐々木高綱(真田幸村)は、帝を奉じて鎌倉方の機先を制しようとして企てるが、佞臣大庭三郎に妨げられる。時政は頼家に先んじて上洛し、両軍は再び決戦の構えをみせる。三段目(京方の勇士和田兵衛(後藤又兵衛)は頼家母子の情弱を憤り、いったんは主従の縁を切るが、宇治の方(淀君)のたつての頼みに、頼家の若君公暁丸(公暁)を預る。四段目(和田兵衛夫婦は公暁を守って鎌倉勢と奮戦する。五段目(京方の鷲尾三郎(長

曾我部盛親)は盗賊摺針太郎左衛門となつて世を忍び、和田兵衛夫婦としめし合わせて、和田兵衛の子を公暁の身替りに立て、鎌倉勢を欺く。本吉四郎(島津義弘)は公暁を預り、蝦夷が島に匿う。六段目(百姓藤三郎は佐々木高綱と生き写しのため、鎌倉方に佐々木と間違われて捕えられる。高綱の妻篝火は、藤三郎を高綱の身替りに仕立てようとするが、かえって時政に偽りで見破られ、藤三郎は高綱でない証明に入れ墨をされる。七段目(時政の娘時姫(千姫)は敵方の三浦之助を慕い、三浦之助の病氣の老母にまめまめしく仕えるが、三浦之助は時姫を疑い、心を許さない。藤三郎は時政に抱えられ安達藤三郎と名乗り、時姫に、三浦之助と縁を切り老母を殺して帰れとの時政の命を伝え、時姫は父と夫の中に立つて苦悩する。三浦之助は夫の敵、父時政を討てと迫り、時姫もついに承諾する。藤三郎は実は佐々木高綱と本名を頭わし、三浦之助も顔死の深手を負ったことを打明け、高綱に後事を託す。老母は時姫に、父時政への義理を立てさせるために、自ら姫の槍先を受けて死ぬ。八段(九段目(京方の松田左近と妻朝路は鎌倉から京へおもむき(道行)、朝路の兄快哲の頼智で鎌倉方の討手から逃れる。十段目(坂本城は落城間近く、三浦之助討死の報に時姫は悲嘆にくれる。藤三郎の高綱は、姫に時政を討てと促す。時姫は父に代つて高綱に討たれようと、見破られて自害する。時政は高綱の放つ鉄砲を受けるが、三つ鱗の旗に守られてつつがなく、頼家父子は蝦夷が島へ逃れ、高綱は出家する。【特色】七段目の「絹川閑居の切場」三浦別れの段は悲痛な内容を艶麗な東風の節付けで彩つた名曲で知ら

れる。【諸本】初演時の正本は七行百五丁本がある。【翻刻】日本古典文学大系『浄瑠璃集・下』(鶴見誠解説)。(内山美樹子)【参考文献】長谷川強『浮世草子の研究』昭和44年。○横山正『近世演劇論叢書』昭和51年。○中村幸彦『浄瑠璃絵巻の効用』(『語文研究』15、昭和38年1月)。○内山美樹子『太平頭整飾』の諸本(『演劇学』7、昭和41年12月)。

鎌倉実記

十七卷十七冊。軍記。洛下隠士著。享保元年(一七二〇)自序。享保二年京都唐本屋八郎兵衛刊。【内容】源頼朝の伊豆配流から、源義経が高館より金国に逃れるまでの間、源平二氏の争闘の流れに、挿話をはさんだ、軍記風の近世読み物の一。二十五部の参考書のうち、八種の『平家物語』とその異本を掲げ、本文も平仮名まじり、物語詞である。しかし記録を引用したり、著者及び別人の片仮名の評語・割注も多く、一応史書の体をも持つ。『金史』を引いて義経逃亡説を掲げるなど、出拠の有無にかかわらず、珍しい話が多い。よって都賀庭鐘その他、後の作者の材となっている。【著者】『近代著述目録後編』に医家の加藤謙斎とする。謙斎、字衛愚。序の一印に「字愚」とあるによるか。未だ定めない。【諸本】京都茨城多左衛門刊の後刷もある。【中村幸彦】

鎌倉諸芸袖日記

五卷五冊。浮世草子。八文字自笑・八文字其笑作。実は多田南嶺代作。寛保三年(一七五三)刊。いわゆる氣質物の一。【内容】表題は浄瑠璃『鎌倉袖日記』をもじるが内容的には関係なく、諸芸・諸道を主題に、「おち」のある珍話を工夫したもので、各巻三話ずつから成

る。【諸本】初演時の正本は七行百五丁本がある。【翻刻】日本古典文学大系『浄瑠璃集・下』(鶴見誠解説)。(内山美樹子)【参考文献】長谷川強『浮世草子の研究』昭和44年。○横山正『近世演劇論叢書』昭和51年。○中村幸彦『浄瑠璃絵巻の効用』(『語文研究』15、昭和38年1月)。○内山美樹子『太平頭整飾』の諸本(『演劇学』7、昭和41年12月)。

る。儒者の子が座頭となり、座興の席で講釈説教して失敗する話(巻一の一)。老荘に擬って唐音で無点の書を読む閑才という男、上京して色の道にはまり込み、傾城買指南所を開くという話(巻一の二)。相撲好きの和尚と神主が追放される話(巻一の三)。茶の湯に凝った撰州池田の蜂房屋伊右衛門が、裸で花を活けている最中に正客が戸を開けんとするので、開けさせまいと踏んばったが、戸がはずれて双方怪我をするという話(巻一の一)。能楽に入れ込んだ上、若衆好きで女嫌いの大名の所に、許嫁(おめ)の女が若衆に変装して、能の門人になりたいたいと言ってくる話(巻一の二)。女郎が策略して、酔臥している太鼓医者(お太鼓)の足指から採った血で、大臣客に渡す血起請をしたためるとい話(巻二の三)。快禪律師は生き仏と仰がれて布施が山を成していた。貸金の口入屋どもが、この金を借り出さんには、律師を色道に引き入れるにしかずと策するが、律師は実はその道に深くなじみがあるのみならず、口入屋より逆に五百両をとり込むという話(巻三の二)。見世物師が魂胆あって狸の腕を切って持って来たのを、大真面目の陰陽師は自分の法力によって取った妖怪の腕と信じ、開帳に出す。その腕の保存のために煙にふすべるのを引き受けて失敗し、黒焦げにしてしまった男が、それをとりつくろうために怪談を捏造して語る。陰陽師はそれをまた信じて、ますます秘蔵するという話(巻三の二)。兵法者が、果し合いの場で、下帯をしておらず無念なりと言ったので、相手は呆れて、果し合いは取り止めとなるという話(巻三の三)。老人ながら踊り・物真似・浄瑠璃に凝る親父あれば、隣家には唐音に凝って得意

客に逃げられる息子ありという話(巻四の一)。学問で物々しい医者も役に立たず、無学の医者も困り者であるという話(巻四の二)。道具目利が、根付を一角(ウニコール)のもので三貫六、七百目と見したところ、実は鯨の蟬骨のもので二十八文の品であったという話(巻四の三)。名譽法印という山伏が書判の墨色占いをすると、家来が大事に持ち扱おうのを見て、主人(大名)のものに相違なしと判じて多額の札を取る話(巻五の一)。狩野茂信という下手絵師が絵では渡世なり難しとして、蠅取豆の法を工夫したが失敗する話(巻五の二)。隣同士二軒の櫛間屋が常日頃不仲であったが、これは実は双方の使用人の実不実を試みる手段であったという話(巻五の三)。本書は上田秋成の浮世草子や式亭三馬の滑稽本に影響を与えた。【翻刻】有朋堂文庫『八文字日本文学大系』八文字屋集。【浜田啓介】

鎌倉千句 替々。一冊。連歌。兼如(兼如)の独吟。慶長十三年(一六二八)十月四日成る。同十五年十二月とする本もあるが従いがた。別称「鎌倉天神宮千句」「荏柄(あまがら)千句」「荏柄天神法案千句」「兼如千句」など。伊達政宗の命によって兼如が参籠、十日間で成就した。兼如の代表的作品。発句は四季題で、第一発句山何(咲きて)梅色をましたるい垣かな(政宗)(広島大学本)。第二以下

目一景清は人丸と対面し、今日の客の大尺が国時とわかってこれを取り押え、近平・清忠と共に鎌倉へ下る。【特色】謡曲「景清」を主たる典拠に、観音靈験を盛り込んだ善悪葛藤譚。いかにも古浄瑠璃的な作品であるが、男色女色織りまぜての濡れ場や遊里情調に当世化が目につく。影響作としては、豊竹越前少掾追善浄瑠璃・観景清八嶋日記(明和元年十月豊竹座が著名。これは、本作と「出世景清」を取りまぜた「大仏殿万代石楚」(享保十年十月豊竹座)の改作。【諸本】十行本に、三六八丁、三十丁、二十八丁本があり、他に土佐掾八行本や文弥十行本もあるが、後のものか。正徳五年(一七三三)正月江戸鶴屋版「日向かけきよ」(外題「人丸れんぼの縁」)は、本作の六段本。【参考文献】若月保治「古浄瑠璃の研究」(昭和19年。)

〔湯之上早苗〕

鎌倉袖日記 五段。浄瑠璃。松本治太夫正本。「鎌倉袖日記付タリ日向景清」ともいう。刊年未詳。元禄(一六八八)頃か。【梗概】初段 頼朝は教経秘蔵の弓と景清の太刀朝日影を若宮八幡宮に奉納し社参。三保谷国時の弟近平が、その日の奉行で衆道の思いを通わず秩父清忠を待つ所へ、景清の娘人丸が父の仇と国時をねらうが仕損じ、国時の執権早崎弥太夫に追われるところを近平に助けられ、近平に想いを抱く。一方、頼朝社参の日の力競べから、国時と清忠はお互い怨みをいだく。二段目 人丸から景清の太刀を一目見たいと頼まれた清忠は、人丸に濡れかかる。清忠を射殺させようとの兄国時の謀略を知らせんと駆けつけた近平は、この様に嫉妬するうち、清忠は肩先を射られる。清忠は、下手人を仕留めて、人丸と共に扇谷へ去る。三段目 国時は扇谷の清忠の邸へ押し寄せ、軍となる。鎌倉を追放された人丸は投身を凶るが、守本尊が近平と現じて救い、景清の所在を告げる。人丸はその教えの通りに、室の津で百両で身を売り、二十日の暇を貰って日向へ下る(道行)。四段目 草刈童の導きで盲目の景清に対面した人丸は、大名の養女になったと偽り、景清に、上落して官を登せるようにと、百両を渡して立ち帰る。あとで景清は真実を知って愁嘆が、清水観音の化現であった草刈童の教えで、人丸を請け出すべく播磨に向う。途中の観音堂で、強盗になり下った弥太夫に金を強奪されそうになるが、観音の功力でにわかにかつ太夫の両眼潰れ、かわって景清開眼。弥太夫を討って、室の津へ急ぐ。五段

鎌倉武家鑑 六卷六冊。浮世草子。江島其碩作。正徳三年(一七三三)正月、京都谷村清兵衛刊。外題傍書「付タリ真草行今川当世状」。【梗概】足利頼兼の執権山梨子(あま)日向前司久国は小祿より出頭し、天下傾覆をはかる。忠臣今川備中守俊秀はこれに対抗している。頼兼は美少年の花山一角を寵し、久国の智紅井友清はこれを養子にするが、一角は同輩渡辺角王丸への義理から顔に焼火箸を当て、頼兼へとりもとうとする紅井の計は頓挫する。俊秀は頼兼の女色を諫めようとしてかえって紅井の計に陥り襦籠で琵琶湖に沈められようとするが、撞木(うき)町の女郎今川の情人三浦四郎三谷に救われる。俊秀は頼兼を諫めて三浦に女今川を与えさせる。実は女今川は一

角の姉であった。俊秀は閉門となり、頼兼から派遣された渡辺早知・畠山重益らの討手は、乞食の首を斬って俊秀を救うこととし、かつての一角の恩人児島平六左衛門が零落、乞食となったのに逢う。児島は友人に託した子の行方を求めており、一角はその情報を提供し、他の乞食の首を斬って頼兼に捧げ俊秀を救う。久国は頼兼に昔寵愛の雪の前に落胤ありと男子を示し、これを若君宝珠丸とする。一方児島は旧友芦尾の兵衛(久国臣)とわが子六之進のことで口論し、一角の父塵海方(今川・三浦と共に同居する。塵海は親のために身売した今川の前身を知って勘当する。児島を襲った芦屋は誤まって塵海を殺す。一角と児島は三浦を疑い敵討に鎌倉へ赴く。久国の追手を三浦が捕えて児島らの疑いを晴らし、また一角は父の仇を討つ。三浦は俊秀の奥方を預り生活に困り飯粧坂(新)の女郎屋を継ぐが病気になる。伝来の来国俊の刀を妻の今川に譲って死ぬ。三浦の姉婿は刀を得ようと今川に恋慕。今川はのがれて奥方と上方へ出立つ。久国は軍道鍛練の士天野盤戸(か)右衛門を抱え、その献策により頼兼の前に宝珠丸の述懐の文を奉ることとする。天野実俊は俊秀の臣岩瀬の伝内。君前で角王・児島らと久国の陰謀をあげ、宝珠丸とは児島の子六之進なることを明かす。頼兼は迷いよりさめ、俊秀を召出し、児島は女今川と夫婦となり、六之進は三浦・四郎の名を継ぐ。久国は大江山に籠るが、一角らは武将の加勢を得て、これを討伐する。【特色】本書は古浄瑠璃今川物がたりに人名と大筋を借り、五代將軍綱吉と柳沢吉保とにかかわる、後に柳沢騒動として講釈種になる俗説と、さらに榎木町の女

郎今川が吉原のくつわ三浦屋に身請けされ、三浦屋の死後遺産についてトラブルがあったという宝永初年(七五)の事件をかまされた作で、構成の巧みな長編となっている。演劇により構想を立て、その要所を押えて趣向を交錯・転換し、武士的な義理を描く、無署名ながら其頃の時代物初期の作として注目される佳作。【諸本】刊記は同一で『今川当世状』と改題の本と、さらに谷村の住所を削った後印本がある。本書は『今川当世状』で予告され、柱刻は当初より『今川』、本文舞台の殆どが京都なので、一旦刊行後再び当初予定題名に戻されたものであろう。 [長谷川強] 【参考文献】長谷川強 改題本『今川当世状考』(『国語国文』昭和55年8月)。

鎌倉物語 かまくらものがたり 五巻五冊。地誌。* 川喜雲著。別称『鎌倉名勝記』。万治二年(一六六〇)安田十兵衛刊。【内容】鎌倉および近隣の社寺、あるいは邸跡、その他、名勝旧蹟の類の項目を設け説明を加えている。巻一は、鎌倉郡から鍛冶正宗屋敷に至るまで二十九項目。巻二は、西行橋からねぢ松に至るまで二十六項目。巻三は、北条屋敷から和田義盛屋敷に至るまで二十四項目。巻四は、頼朝御屋敷から大倉が谷に至るまで十二項目。巻五は、葉師堂付覚恩寺地蔵から金沢村付八景に至るまで二十四項目。説明に当っては、『吾妻鏡』『平家物語』『太平記』『年代記』などを引き、社寺の縁起由来は、それぞれの縁起由来によっている。各項目の終りには、時々自作の狂歌、および発句を挙げてある。巻一の『鎌倉郡の終りに、花も月も見ゆるや旅ねの高枕、此発句は中川喜雲が作なり。』奥にいたりて

も、名を表はさざる狂句発句みな此喜雲といふすきものが句なりけり」として、喜雲を他人事のように言っているが、序跋・本文ともに喜雲の著であろう。【諸本】後摺本で元禄十三年須原屋茂兵衛刊本、再版で享保二十年万屋清兵衛刊本などがある。【複製】近世文学資料類従・古板地誌編12。【翻刻】近世文学叢書2。 [小川武彦]

鎌田 かま 幸若。室町時代成立。源平物。【梗概】義朝主従は待賢門の夜軍に敗れ、東国をさして落ちる途中、青墓の宿に立寄る。そこで重傷の朝長は鎌田正清の介錯で自害する。義朝は驚の栖の玄光を頼み柴舟の中に隠れて関所を通過し、内海の浦の正清の舅の長田忠致を頼る。忠致は忠勤をはげむが、平家方からの御教書を受けて、子供と義朝主従殺害の謀議をする。三男先生(はら)は父を諫めるが聞きいれられずやむなく出家する。長田は義朝近侍の童金丸に漁の奉行を頼み、内海の浦に出向かせる。金丸は長田の裏切りを察知して主君をいさめるが、逆になだめられる。内海の浦では八艘の大船に分乗した長田の手の者が、漁をするときせかけて金丸を討とうとねらう。一方正清は舅忠致から所領を添えられた盃を受けて飲むうちに酔いづぶれ、その隙を討たれる。正清の妻は悲しみのあまり、二人の子を道連れにして夫に殉じる。これをみた忠致の妻は、娘と孫の跡を追って自害する。長田は義朝に入浴をすすめ、二百余騎で湯殿を囲む。裏切りを知った義朝は、切腹して臟腑を四方の壁に投げつけて、長田に首を討たせる。金丸丸は胸騒ぎに交事を悟り、長田の館にかけつけ、主の弔い合戦をして五十三騎を斬り伏

せて京に上る。【素材・趣向】典拠は『平治物語』下巻義朝内海下向の事「忠致心替りの事」であるが、諸本関係では九条家本系統ではなく、第四類本以下の室町中期以降成立した本文とみられる。特に新出の長谷川端所蔵中巻のみの『平治物語異本』との関係は近接している。この本は天正・文禄二五三―五五頃の成立とみられている金刀比羅本系の異本で、金刀比羅本系諸本が鎌田正清のあとを追うのは妻だけであり、子供や長田の妻に関する記述がないのに対して、この本は舞曲と同じく長田の妻・娘、その子の四人の死を物語る。ただし鎌田の名前は正家で九条家本系と同一であるのに対し、舞曲は正清で金刀比羅本系諸本と同じである。また長谷川本では鎌田の子は男女であるが、舞曲は男二人である。詞章は部分的に共通している。本曲は歴史上有名な源氏の棟梁義朝の殺害事件が中心題材であるが、一曲の成立の契機には、文明十八年(一四八六)に太田道灌が上杉の館に招かれて入浴中殺害された事件、永正四年(一五〇五)幕府の管領細川政元が入浴中家臣に殺害された事件などがあると考えられ、成立は室町末期頃と考えられる。典拠を離れての創作部分は義朝近侍の童金丸に関する部分である。運命を予見して主君をいさめ、主君の弔い合戦をして報復する人間として主役的位置に置いて、義経に対する弁慶と同じく英雄的に描かれている。この金丸丸像に対する見方としては、義朝の死を語る語り手金丸丸像の増幅とみることもできよう。【影響】説経浄瑠璃『鎌田兵衛正清』(説経正本集3に翻刻)、浄瑠璃『待賢門平氏合戦』(菅原の親王)があげられる。【諸本】諸正本揃物の中。越前幸若系の慶応義塾本・毛利

家本・内閣文庫本、大頭系の文禄本・関大本
・黒田家本。古活字版本。【複製】古典研
究会叢書『幸若小八郎正本幸若舞曲・上』。
『毛利家本舞の本』(横山重・村上学、昭和55
年)。天理図書館善本叢書『舞の本文禄本・
上』。岩崎文庫貴重本叢刊『幸若舞曲・御伽
草子』(古活字本)。【翻刻】『幸若舞曲集・
本文』(笹野堅、昭和18年。毛利家本)。古
典文庫『舞の本・下』(内閣文庫本)。

〔麻原美子〕

鎌田柳泓 かまがり 心学者。諱は鵬、通
称は玄珠。柳泓は号。宝曆四年(一七五四)紀州
湯浅の人久保又右衛門の三男として生ま
れ、十歳の折り、京都の医師鎌田一窓の養
嗣子となり、やがて家業をついだ。文政四
年(一八三三)三月、京都で没、六十八歳(柳泓
鎌田先生事蹟)。【事蹟】養父一窓が齋藤
全門について心学を学び、『売卜先生糠俵』
を著すほどの人物であったこと、また自
身、富岡以直の下で修行したことにより、
ひとかどの心学者となった。同時に、漢学
・詩文・医学・蘭学・理学等の広い教養知識を
修めて、独自の教説を樹立するにいたつ
た。儒・仏・老荘の三教を足場として「心学
的なもの」を求め、遂に「敬」において収斂
している点に特徴がある。これを足場に、
社会的・人間的諸事象の究明を試み、特に
心理の働きに深い注目を払っているので、
日本最初の心理学者に擬する説さえある。
著作は、『朱学弁』(享和二年(一八一二)刊)、
『心学五則』(文化十年(一八三三)刊)、『理学秘
訣』(文化十三年刊)、『心学奥の棧』(文政五
年刊)（いずれも、日本思想大系『石門心学』
に所収)など。〔註〕七五五—一八三三

〔石川松太郎〕

【参考文献】石川謙『石門心学史の研究』昭和13
年。

【龍將軍勅略之卷】

三卷。黄

表紙。時太郎可候(葛飾北斎)作。画。自跋
あり。「龍將軍」は一家の権力者、「勅略之
卷」は兵法書「三略」の巻にかける。寛政十
二年(一八〇〇)戯作外題鑑、江戸葛屋重三郎
刊。【梗概】西の国百万石の太守だから大
じん(駄駄羅大尽)かひろむねは奢侈放埒を
尽くす。これを憎む掛取の城の大將小なべ
かゆのかみうわすみ(小鍋粥之守上澄)は、
むぎのかうじせう(麦の麴少將)ありか
ねと組み、節儉の要害に軍備を固め、応戦
は手薄な勝手口から押寄せ、調度を武器に
する敵方の防戦を破り、御台所かくごのま
へ(覚悟の前)は逃亡、奇手の乱入で借財の
淵となり落城、ひろむねも裏住みに脱出す
る。しかし野射問(の)のよのなかせうちの
すけ(世の中承知之助)の反撃、出店(だて)の
ばんとう太かねあり(番頭太金有)の金の弓
矢の援軍により掛取勢を敗北させ、両者五
分五分の戦果を得た時、龍神の三玉荒神が
出現し、過度の奢侈儉約を諭す訓戒を垂
れ、両者を和解させる。【趣向】一家の主
人の奢侈による借財、心機一転した儉約に
よる安泰の、家庭経済の要点を強調し、儲
利にたくましい商人の行動も暗喩、これら
を地口めいた登場人物名とその行動で綴
る。「世帯平記(よせたい)の趣向で、趣意は平
凡ながら、連発する言語遊戯の巧みさで滑
稽感を横溢させる。なお巻末「古代」の箇所
に、北斎が馬琴の添削を頼り文のある点が
注目される資料。【複製翻刻】有朋堂文庫
『黄表紙十種』。「北斎の黄表紙(三)」「浮世絵

芸術』昭和49年11月、安田剛蔵。〔鈴木重三〕

【龍神秘説】

一冊。神道。玉田永

教(なが)著。文化四年(一八三三)九月、竜淵主人
序。画入り。関係者に配布したものと思わ
れる。【内容】扉に「此書は龍神の神徳を
委しく著し、朝暮、清浄に齋き祭れば幸ひ
ある事を記せし書也」とあるのが、すなわ
ち本書の内容である。龍神は、素戔嗚神の
孫で、大歳神の子に当り、名を澳津彦命・
澳津姫命と申し奉ると説き、また龍は、火
徳の神、香山戸神の名をもって名づけられ
たものであると述べる。龍は、清浄の土を
えらんで塗り立て、東向きを第一、南向き
はこれに次ぐものとし、龍は大切なもの
で、富貴貧賤、ことごとく龍によるのであ
るから、毎朝火を改め、潮祓を行い、
月々、龍祓をなすべきであるとしている。
なお、本書の末には、龍神に関する「可心
得之事十三ヶ条」、ならびに、神徳・旅行出
立・新室家移・夫婦和合・六根清浄などの諸
項に言及している。著者は吉田神社の神道
講釈師で、庶民に接していた彼らの態度を
示す一書である。〔岸本芳雄〕

【鎌腹】

狂言。鞆女狂言。別名「腹

不切(せき)」。【梗概】家のことを構わない
夫(シテ)に腹を立てた妻が、尖端に鎌を結
びつけた棒を振り上げ夫を打ち殺そうと追
いつけてやっとうその場は収まり、男は山へ
働きに行く。しかし、このように妻にやか
ましく攻めたてられるくらいなら死んだ方
がましだと思つた男は、百姓らしく鎌で腹
を切つて死のうとするが、根が臆病者と

て、あれこれと苦心するが、何としても死
ねない。【特色】いろいろな方法で自殺を
図るこの独演の場が見どころになってい
る。結末は、どうしても死ねない男が、諦
めて山へ出かけることにして終わったり、
女が出て和解したり、驚いてかけつける女
に「自分の名代に死んでくれ」と言つてまた
怒らる、逆に追い込まれたり、台本によつ
ていろいろの演出が伝えられている。【台
本】大蔵流一虎明本・虎寛本(岩波文庫『能
狂言』・山本東本(日本古典文学大系『狂言
集』)。和泉流一天理本『狂言集』。鷹流
賢通本。その他一「狂言記外」。

【鎌髭】

歌舞伎。歌舞伎十八番の

一。初演未詳。享保四年(一七五五)春、江戸森
田座「傾城紫手綱」における松本七蔵(四世
市川団十郎)とその父初世松本幸四郎所演、
あるいは、明和六年(一七六九)正月十五日より
江戸中村座「曾我我愛護若松(そがら)」に
おける四世市川団十郎所演の男達前髪左平
実は景清ともいわれるが明確でない。『歌
舞伎十八番考』にも「六部、未見当」とある。
【内容】「鎌髭」とは、奴の風俗で知られる
鎌を逆にしたような髭の形であるが、髭剃
りと見せて首を掻き切ろうとする演技によ
来するとも考えられる。安永三年(一七五五)江
戸中村座「御詠染曾我雛形(そがら)」で、
鍛冶屋四郎兵衛実は三保谷四郎が、六部姿
の快哲実は悪七兵衛景清を、髭剃りにかこ
つけ鎌で首を掻こうとするが、「不死身の
景清」を切る事が出来ず双方ぎしみ合う
荒事を見せる趣向がある。【伝承】「魔絶」
現行の「鎌髭」は、明治四十三年(一九一〇)十
月、東京歌舞伎座で二世市川段四郎、二世

〔石川松太郎〕

市川猿之助父子によって初演されたもので、『御詠染曾我雛形』に基づいて竹柴金作が台本の補綴をしたもの。〔景山正隆〕

【参考文献】河竹繁俊『歌舞伎十八番一研究と作品』昭和19年。○『板康二』歌舞伎十八番昭和30年。○都司正勝『歌舞伎十八番集』(日本古典文学大系)昭和40年。○『歌舞伎十八番』(図説)日本の古典(昭和54年)。

神遊考

一冊。注釈。賀茂真淵著。別名『賀茂翁存稿』(外題)、『神遊考』。明和三年(天保)十月跋。【内容】本文は鍋島家本『東遊歌神楽歌』、同裏書を底本としているが、神楽歌を前に、東遊歌を後に置き、神楽歌の順序も、鍋島家本では「宮人(みやび)」の次にある「難波(なみの)」を、「階香取(かき)」の後に置いている。ただし鍋島家本文の表記は万葉仮名、同裏書は万葉仮名・平仮名・片仮名を混用しているが、本書ではすべて万葉仮名に改め、本文も他本または傍書によって改めたところが少なくない。いわば鍋島家本を基にした神楽歌の校訂本である。注釈は歌詞の注釈・出典にとどまらず、神楽次第、人長(ひとなが)の舞との関係にも目を注いで、解説を加えたり、疑問を提示したりしているところに、神楽歌の注釈としての特色が認められる。【諸本】京都大学図書館・東京大学図書館・東京芸術大学図書館などに写本がある。【翻刻】増訂賀茂真淵全集10。

〔土橋 寛〕

神遊びの歌

神前で奉奏する歌謡。「遊び」は平安時代には楽歌を主としていたが、東遊に舞を伴うのを見れば、元来は舞踊を含み、さらには芸能と重なるものであったであろうと考えられる。そしてそれは魂を鎮め、あるいは魂を振り義を有していたと思われる。平安宮廷の神楽歌の採物(ひらき)の条に、「瑞垣の神の御代より篠の葉を手ぶさ」と取りて遊びけらしも(鍋島家本神楽歌ほか)と詠まれていることよって、「遊び」の伝統的意味が観取される。『万葉集』の時代に神楽を「かぐら」と訓んだ証拠はなく、おそらく大和言葉で「かみあそび」と呼ばれていたのであろう。『古今集』巻二十に「神遊びの歌」として採物の歌六首(種二首・葛二首・弓一首・杓一首)、日女(ひめ)の歌一首などが収められている。平安宮廷の神楽歌にあつても、採物の歌は神降臨の標識であり、憑依の座である採物を歌う。勅撰集から見ると、『拾遺集』では巻十を神楽歌としている。醍醐朝に神楽譜が撰定されて、公式には神遊びは神楽に替わらした。〔日田甚五郎〕

紙 蚕

三冊。俳諧。超波編。享保十八年(享三)刊。江戸万屋清兵衛版若菜屋小兵衛版の後刷本もある。貞佐門の編者が師の「代々蚕(か)」にならつて、自句を発句とする三十五歌仙を収めた集。独歩・巷の三冊に分れ、貞佐序・自跋を付す。「中頃の俳諧の風流なる」を慕う、洗練された温和な作風である。一座の連衆は、貞佐・有佐・湖十・永機(二世湖十)・二世青嶽・青蘊(米仲)・泰里(存義)・羊素・曉雨・木耳・長水・蓮之・莎鷄・佳丁(魚貫)・才牛(二世市川團十郎)・訥子(初世沢村宗十郎)ら、五十九名にのぼる。【翻刻】古典文庫『江戸座俳諧集(四)』。〔白石悌三〕

神風記

五巻五冊。神道。匹田以正(ひら)著。寛文八年(二六)自序刊。【内容】本文に「元を元として本朝神風のすなはなる道をしらしめんとなり」とあつて、書名の由来が知られる。「本朝に生まれ、神裔たらん者は、ひたすらに神の教に本づき、神の法を守り、神の道を明めて後、終りに神明の位にいたらんとおもふべし」と述べて、この書を記した態度を示している。建国の由来、神道の根本義、諸国の主たる神社の縁起、祭祀の次第、葬祭をはじめとする諸儀式等を説明し、各章の終りごとに典拠例文を掲げ、神道の概要を知るのに便利な書である。本書は「正直清浄なるを本とする義肝要なり」という思想で貫かれ、「凡そたふとみまもる所のものは、何ぞといふに、宗源神道是也」と言っている如く、いわゆる吉田神道流の考え方を基礎としながら、著者一流の見解を展開している。【翻刻】日本教育文庫・宗教篇。日本国粹全書。〔加藤隆久〕

上方歌

歌謡・音楽用語。古くは、盲人音楽家の伝承する三味線歌曲を江戸から言った語。すなわち、現在「地歌」といつているものをいう。『守貞謄稿』には、「京坂ニテハ地唄ト云、江戸ナドニテハ上方唄ト云也」とあるが、その他の文献上の用例は少なく、しかも、関西では「唄」の字の用例も少ない。一般には、「浄瑠璃」に対して、単に「歌」といふ、あるいは「歌曲」「弦曲」などといった。また、箏の意の琴を合奏させることから「琴曲」といつた場合さえある。ただし「箏歌(びんが)」とは区別される。「地歌」の語は、文化(二八)以降、江戸の音曲が上方に入って、これを「江戸歌」といつたことから、それに対する語として生まれたものらしい。しかし、演奏家自身の公式使用例は、明治八年(二六)の「地歌業仲間(後の当道音楽会)の結成以後と思われる。ただし、現在では、「江戸歌」のうち、東京において長唄なり豊後系浄瑠璃なりその原籍を明らかにして行われているものは、関西でもその本来の名称で呼ぶようになったので、上方でしか行われていない長唄あるいは豊後系浄瑠璃および地歌の端歌(はうた)を除く端歌のみ「江戸歌」というようになって、それでも誤解を招きやすいので、むしろ「上方歌」ないし「上方唄」というようになった。したがって、現在「上方歌(唄)」といえは、地歌以外の上方のみ行われている原籍不明の歌および流行端歌のことのみをいうようになり、狭義には、その後者のみをさし、それを「上方端歌」というようになった。

【分類】本来の「上方歌」すなわち「地歌」は、「松の葉」以来、「三味線組歌」(三味線本手)、「長歌」(上方長歌)、「端歌」(地歌端歌)などに分類され、そのうち、組歌と長歌とが伝承上の規範曲とされ、端歌は、常に自由に新作されてきた。ただし、享保(一七)三二(享三)以前に、京阪の歌舞伎芝居で用いられたもの、あるいは芝居関係者の作詞・作曲のもので、盲人音楽家の間で伝承されたり改曲されたりしたものは、特に「芝居歌」ということもある。寛政(二九)一八(一八)以降、長歌・端歌のうちで、手事に比重のある曲は、これを「手事物(てぶつ)」として特立させるようになったが、文化以降、変奏度の高い箏を合わせるようになり、特に京都においては、はじめから箏を合奏させることを前提としたり、箏の手付者と共同

で作曲したりするようになった。そうした「手事物」を、現在では「京風手事物」ともいうが、それは、箏の面からいえば、むしろ「箏曲」ということもでき、山田検校創始の山田流以外の流派においては、組歌以外の箏曲の古典は、この「京風手事物」、あるいはそれに準じて変奏度の高い箏の手が付けられている三弦曲を中心となつてゐる。山田流にも、この手事物や端歌の一部が移されているが、その場合は、まったく箏曲として扱われている。なお、地歌への浄瑠璃曲の移入、すなわち「浄瑠璃物」の成立は、古く『松の葉』巻四に「吾妻浄瑠璃」として収められた上方で行われた座敷浄瑠璃の半太夫節・栄閑節などに始まる。したがつて、『松の葉』は、巻一の組歌、巻二の長歌、巻三の端歌、巻四の浄瑠璃物と、巻四までは盲人音楽家に扱われた芸術的歌曲の書といえるもので、決して流行歌謡の書ではなく、いわゆる近世小歌は、巻五の投節のみである。その後、元文・寛保(五三)一齒巴頃に大阪で流行した豊後系浄瑠璃の繁太夫節が、盲人音楽家の鶴山勾当によって地歌に移入され、明和(二五)一七(三)頃には、半太夫節・繁太夫節の二種が、地歌の浄瑠璃物の主流となつた。ただし、浄瑠璃物の中で、座興的・即興的に作られ、詞章の固定性の薄いものは、宝暦(二五)一七(三)頃から、特に「作物(さく)」と呼ばれ、結果として滑稽な内容のものが多く、筋付面では、半太夫節の影響が大きい。古くは、「おどけ上るり」ともいった。

【作詞】組歌の作詞ないし編詞者は不明であるが、長歌・端歌となると、作詞者の伝えられているものも多い。長歌には、作曲者たる盲人音楽家自身の自作のものも多いが、西鶴の作と伝えるものなどもある。端歌となると、文人・俳人たちの関与するものが多く、享保期では、柳沢淇園など、天明(二六)一七(三)では、二斗庵下物・流石庵羽積などの作詞が知られる。作物は、その性格上、作詞者のみならず、作曲者も明らかにせず、また、芝居歌は、俳優が作詞者に擬するものが多い。長歌の古いものは、統一素材でありながら、小編の歌を集めた組歌的形式のものや、物づくし的なものもある。端歌は、宝暦期において、和歌調から俳諧調への転換が行われている。なお、謡曲に素材を仰ぐものは、「謡物」として分類することもある。

【作曲と伝承】組歌は、柳川検校、野川検校の整理以後は、深草検校の新作を除いて、まったく新たな創作はなく、単に伝承上の規範曲となつた。長歌は、佐山検校の創始と伝えられるが、京都、大阪で別々にその伝承・増補が行われ、特に大阪では野川検校以後の増補・整理が盛んで、天明期には百曲以上を数えたが、後に津山検校が五十曲ほどに限定して、伝承本位となつた。しかし、現在では、そのうち二十曲余しか伝承されていない。端歌は、特に宝暦期の歌木検校の改革後、創作が活発となり、天明以後の峰崎勾当の時代に頂点に達し、文化・文政期には六百曲前後に及ぶが、現在にまで伝承されているものは、非常に少ない。手事物の作曲者としては、大阪では峰崎勾当・三つ橋勾当、京都では松浦検校・菊岡検校・光崎検校・石川勾当などが有名である。組歌の伝承は、京都の柳川流、大阪の野川流と、その伝承の系譜が明らかであるが、必ずしも組歌を扱わなかった者も少なくなく、地歌全体の伝承系譜は、単

一化しえない。特に、箏の伝承は、また別度の系譜を持ち、その上盲人としての登官制の師弟関係は、さらに異なる系譜を持つ。現在では、盲人以外の伝承者の方が多くなり、家庭音楽として、箏曲と結合して広く普及するに至っている。なお、上方の舞の地としても用いられ、端歌が中心であるが、舞の地として用いられたり芝居の下座に用いられたりしている江戸歌系の端歌、すなわち狭義の上方端歌は、盲人音楽家ないし地歌の箏曲家は、本来は演奏しないのが原則である。

【収録書】地歌の詞章は、『大怒佐(健)』松の葉』以来、収録記録されているが、享保頃の『古今端歌大全』(その増補が『吟曲古今大全』を経て、寛延(五三)以降には、いわゆる地歌歌本の刊行が盛んとなり、京都における『琴線和歌の糸』をはじめとする『糸の節』類、大阪における『糸の調類』などは、次第に増補が重ねられて、いわゆる枕本体裁の部厚なものとなり、文化・文政の『歌曲時習考(かきとま)』に至つて頂点に達した。なお、天明二年刊の『歌系図(うたけ)』以来、作詞・作曲者が明示され、『歌曲時習考』にも踏襲されたが、これは、邦楽の中では珍しいことである。楽譜の公刊本には、享保十八年刊の『三十六声籠の塵(こぼり)』(長歌)、宝暦十二年刊の『音曲力草(ねま)』(端歌)、文政十一年刊の『絃曲大標抄』(組歌・端歌)、天保十三年(二六)三刊の『三絃独稽古』(端歌・手事物)などがあり、箏の手付を記すものに、文化六年刊の『花のひびき』、天保四年刊の『千重の一重』などがある。

【参考文献】佐々野雪『俗曲評釈』(上方明治43年)。藤田徳太郎『近代歌謡史略』(校註日本文学類従『近代歌謡集』昭和4年)。藤田斗南『箏曲と地味の味ひ方』(昭和5年)。東洋音楽学校編『箏曲と地歌』(昭和42年)。平野健次監修『上方の端歌』(レコード並びに解説)昭和38年、日本ビクター。同『三味線音楽事始』(京阪芝居歌と地歌の源流)レコード並びに解説)昭和48年、CBSソニー。○平野健次監修久保田敏子監修『三味線組歌全集』(レコード並びに解説)昭和49年、CBSソニー。○同『富山清琴地歌の世界』(レコード並びに解説)昭和50年、日本コロムビア。○平野健次監修『箏曲地歌、阿部桂子全集』(レコード並びに解説)昭和55年、日本ビクター。○平野健次『地歌の歌謡書』(日本歌謡研究資料集成9、昭和55年)。○平野健次・久保田敏子『寛延以降地歌歌本総合索引』(吉川英史先生還暦記念論文集・日本音楽とその周辺)昭和48年。○同『寛延以降地歌歌本収録曲作曲家索引』(『東洋音楽研究』39・40、昭和51年10月)。○久保田敏子『盲人音楽家の系譜』三代関の地歌箏曲家を中心として『寛谷大学論集』40、昭和49年6月。○平野健次・谷垣内和子『地歌箏曲家の検校登音年』(盲人諸書類、表録、座下控に見られる盲人音楽家の系譜)『東洋音楽研究』45、昭和55年8月。

紙子仕立両面鑑(おみせり) 三巻。浄瑠璃。菅專助作。角書助六揚巻。通称「助六心中」。明和五年(二六)十二月二十一日大阪豊竹此君座初演。構想は、歌舞伎の「助六心中紙子姿」、一巾節の「助六心中」、義太夫節の「二万屋助六二代桶(さ)」などの先行作によつてゐる。【梗概】上の巻一、万屋助六は馴染の傾城揚巻身請の手付金に窮する。それにつけてこんだ番頭伝九郎や猪熊丹左衛門、道具屋金七らに賈金をつかまされる。助六の親助右衛門は助六を勘当する(万屋新清水)。中の巻一、金七を殺してしまった助六と揚巻は都をのがれ去る。助六の妻お松は助六のために身売りにして金をととのえる(東堀堀止・大文字屋)。下の巻一

【参考文獻】佐々野雪『俗曲評釈』(上方明治43年)。藤田徳太郎『近代歌謡史略』(校註日

いったん揚巻の親里に身を隠した二人は、ついに死を決するが、丹左衛門らの悪事が露見し、二人の罪は消える。助六はお松を妻に揚巻を妾として円満解決する(楠葉親里 牧方堤 長柄晒場)。【影響】中の巻の大文字屋の段は上方系の歌舞伎に移されて上演される。【諸本】大阪正木屋小兵衛・江戸鱗形屋版、七行六十一丁本。【翻刻】世話浄瑠璃大全・上。名作歌舞伎全集14。〔林 京平〕

神路手引草 三巻。神道。増穂残口(註)著。享保四年(一七二七)七月、大阪山本九右衛門刊。「残口八部書」の一。【内容】民衆相手に神道を布教した、いわゆる俗神道家である著者の通俗的説教書といふべきもの。分に応じて努め励み、安心立命を得るのが神道の本分となる、と説く。一老女との問答体をもって、老女をして神道について語らしめるという構成方法をとる、鳥居・千木・榎木・拍手の由来、根の國・底の國・高間原の意義、神像、正直、祈禱師・祭主・宮司の意義、カミの訓、日待月待の行事、太占、祈言・厭魅(註)をはじめ、神道のさまざまな事柄について記す。【翻刻】神道叢説(国書刊行会、明治44年)。日本思想大系「近世神道論・前期国学」。

〔岸本芳雄〕

神路山 一冊。連歌。荒木田守則の自撰句集。永正四年(一五〇七)十月十日成立。作者は伊勢内宮神官で荒木田守武の従兄弟にあたり、従三位・一禰宜に昇り、永正十三年十一月十二日没、七十一歳。「霞もひろきめぐみなるらん／神路山世をほめめかす春たちて」以下、四季・旅・恋・雑の付

合四九四句と、「神路山むめは御衣のにはひ哉」以下、発句七十八句を収め、伊勢神宮神官連歌壇の隆盛を伝える。【諸本】宮内庁書陵部本・静嘉堂文库連歌集書本。【翻刻】続群書類従36輯。〔奥野純一〕

神鳴 狂言。鬼山伏狂言。和泉流では「雷(註)」、「狂言記」では「針立雷(註)」。【梗概】東国へ下ろうとする都の戯医者が広い野にさしかかると中風の持病ある雷(シテ。武悪の面を着用)が落ち、腰を痛める。医者に治療させ、大きな鍼(ツ)を立てられて痛がるが全治し、天上しようとする。医者に治療代を請求されて、八百年の間旱魃・水害の無いようにし、また医者を典薬頭にしようと言ひ置いて昇天する。驚流は西国へ行き印南野にさしかかる。天理本では鎌倉の医師が奥州へ下る。【特色】御伽草子「不老不死」に見える雨童子の話などの影響があるか。京都府の千本閻魔堂の狂言をはじめ民俗芸能の狂言としても残っている。【台本】大蔵流・虎明本・虎寛本(岩波文庫「能狂言」・山本東本(日本古典文学大系「狂言集」)・茂山千五郎家本(日本古典文学全集「狂言集」)・和泉流(天理本「狂言集成」)・鷹流(保教本・賢通本(日本古典全書「狂言集」))。その他「狂言記・続」。

神産巢日神 田口和夫

神屋蓬洲 読本作者。増補続青本年表などによると、通称は青木亀助。蓬萊亭・蓬萊山人龜遊と号した。画名は春川五七。画技は春川米山に学ぶと伝える。門人に春川春泉がある。文政八年(一八二五)五十歳の祝いに狂歌摺物「松の齡」を版行して

いるので、安永五年(一七七六)の生れと考えられ、最後の作である滑稽本「当見席眼(註)」が天保三年(一八三二)刊なので、没年をそのころと推定する。出自・経歴・墓所などすべて未詳。【戯作者小伝】によれば、江戸小石川(一説本郷御弓町)に住し、のち京都に移住したという。移住の時期は文化末年(一八二〇)と思われる。【事蹟】合巻・滑稽本・洒落本も書き狂歌に遊び、画家を兼ね一弦琴もよくしたと伝える。戯作はすべて自画で、版下も自分で書いていたようでありその多才ぶりがうかがわれる。文化四年(一八二七)刊の滑稽本「口八丁」が戯作の初作かと思われ、滑稽本が三、四種あるほか、読本として中本二種「竜孫曼玉(註)」(文化六年刊)、「双三弦(註)」(同九年刊)があり、半紙本「天縁奇遇」(同九年刊)などがある。【双三弦】以外は続編を予告して未完である。唯一の半紙本の読本「天縁奇遇」も第六齣で後編の内容を予告するが、三巻で一応完結する仇討話で、中でも怨霊の祟りで九十九口全身に生ずる悪女野風の描写が中心となっており、全体的構想より趣向を重視する作風と言え、時に「竜孫曼玉」のごとく効果的でもあるが、趣向倒れの感なきにしもあらずで、読本作者として大成し得なかつた因でもあろう。挿絵画家としては北斎の色濃く影響がみえ、構図巧みに迫力強烈な作画ぶりであり、鳥羽絵風の戯(註)れ絵にも軽妙な才を示している。文政年間(一八二〇)大阪の鶴の側の狂歌師たちと作った一連の角判摺物は、独特の濃密な画風で、上方摺物の逸品となっている。【著作】前掲のほか滑稽本として文化十四年「詮気譚(註)」、狂歌本挿絵として文政二年「面迎計百人一首」、風俗絵本として

「愛多凶久誌(註)」がある。〔園「七十七八三三」(横山邦治・松平進)？
【参考文献】横山邦治「読本の研究」昭和49年。

神代小町 二巻。御伽草子。室町時代後半期の成立か。書名中の「神代」はあ

るいは「かみしろ」か。【内容】小野小町の諸伝説中、深草少将の百夜通い・関寺の歌道談義・玉造の觸體伝説等を主軸に構成された物語。『玉造小町壯衰書』をはじめ謡曲の「鶯鷓小町」「関寺小町」等によるところが多い。小町晩年の零落の因を深草少将の恋死に直結している点、また藤原中将が関寺のほとりにて歌道談義を聞き禁中の歌合に面目を施したことを述べ、歌道を説き歌徳を強調する点などは注目される。玉造の觸體伝説には実方中将が登場して供養を営み、これが玉造御堂建立のいわれに結びつく。また小町の老衰を、世の男子の煩惱を絶たしめんがための、大日如来の方便の姿とした点にも特色がある。【諸本】長瀬八幡宮・野田八幡宮にそれぞれ近世初期の絵巻があり、これに基づく二、三の写本が生じた。【翻刻】未刊国文資料「未刊御伽草子集」と研究(四)。室町時代物語大成。〔有川美亀男〕

神代直語 三巻一冊。国学。橘守部著。弘化三年(一八二二)五月晦日の自序があり、その頃成る。【内容】神代の本意を直ちに写して語るとの称と著者は言うが、著者の神代解釈の理法によって意味づけられ、加除整理された神代物語といふべきものである。神代の初めから神武天皇の巻まで及び、仮名交り文で、平言によって記述するが、大体において「古事記」より

述するが、大体において「古事記」より

本書紀を主とする。『稜威道別(れいゐだうべつ)』を簡約にし耳近にしたという。同書に見られた「神秘五箇条」の神典観は、本書の記述でもその原理となつてゐる。神話は語り伝えられて行く中に本来のもの以外に幼言・談辭が加わるのと説に立つて、出雲神話や海宮神話を除き、または簡約にしているのはその一例である。その他、古伝承を独特の解釈によつてつづり合わせ説明する行き方は、『神代正語(かみよのただし)』と書名は似ても、性格は異なる。ただし本書の著述に當つて、本居宣長の右の書が意識されたことは確かである。【諸本】天理図書館に自筆本が所蔵されている。未刊。【翻刻】新訂増補版橋守部全集。国学大系14。〔尾崎知光〕

神代正語(かみよのただし) 三巻三冊。国学。本居宣長著。寛政元年(一七九〇)五月晦日成り、翌寛政二年、名古屋永楽屋東四郎刊。【内容】神代の古伝を、『古事記』を中心として仮名交り文で記した書。神代の物語を、口々に語り伝えられた最も古く正しい形のままに復原し、普及させよう、それには漢字化された本文よりもかえつて仮名文の方がよく、初学者にもわかりやすい、との意図によつて著されたもの。『日本書紀』の説も所々に「又は……ともあり」として付すが、すべての異同を示すのではなく、著者の正伝(正語)の構想の中で肝要と思われる程度で加えている。まれには『日本書紀』の方を主とし、『古事記』を従としてゐるものもある。また古伝の正しい言葉を重視する心から、文字の訓みや清濁には細かな指示を与えている。神名には「延喜式」をも注記している。本書は門人横井千秋の要請によつて書かれたものであるが、宣長自身もこうし

た著作には並々ならぬ力を入れていたものと思われる。【諸本】再稿本三冊、本居宣長記念館蔵。版本には、寛政二年版本のほか、享和三年版や刊年不明のものもある。【翻刻】増補本居宣長全集6。本居宣長全集7。〔尾崎知光〕

神語(かみことば) 古代の歌謡名。【名称】『古事記』上巻の八千矛(やちひさ)神(大國主神)が越の国の沼河比売(ぬまがは)を妻問うた時の問答歌二首、及び嫡妻須勢理毘売(すせりひめ)の嫉妬に困つて、出雲から大和に上ろうとする時の問答歌二首の四首について「此を神語と謂ふ」と記してある。「神語歌」の「歌の文字が誤つて脱落したものかとも思われるが、そうでないとすれば、四首の歌を含む八千矛神の妻問いの物語をそう呼んだかとも考えられる。【成立・意義】神語の歌四首は、「天語歌」と共通する点が多く、同じ伝承者による芸謡的な歌謡と考えられる。そのうち八千矛神の歌と沼河比売の歌には、歌詞の後に「いしたふや、海人駆使(うみかぢ)」、事の、語り言も、此(こ)をば」の句が添えられている(「いしたふや、天駆使」と訓んで、歌詞の本文とする説もある)。これは伝承者の名乗りともいふべき決まり文句であり、「海人駆使」は伊勢の海人出身の宮廷の駆使丁で、語りを専門とするようになったものであろう。なお神語の歌四首を演劇の中で歌われたものとする説もある。〔土橋寛〕

神産巢日神(かみうぶひのかみ) 【神代】初発の三神の一(古事記)。神皇産靈尊(かみうぶひのみこと)とも(日本書紀)。高御産巢日神(たかみうぶひのかみ)とともに根源的な生成力の神格化。高御産巢日神が降臨する側の根源であるのに対して、神産巢日神は、降臨によつて平定される側の「御祖(みそと)の命(いのち)根源的神格」として位置する。高御産巢日神とは対偶的であつて、その力の働く方向は截然と分化している。【本質】『日本書紀』では実質的な意味をもたない存在にすぎないが、『古事記』ではその「神代」の体系をなう存在である。高御産巢日神とともに生成力の神格化だが、これを極度に抽象化して、『古事記』は、万物を生々發展させる作用とエネルギーの根源として「神代」の初発に位置づけるのである。『出雲国風土記』には「神魂命(かみたまのみこと)」が登場するが、これと同次元で扱うわけにはいかない。本来出雲で生まれた神かもしれないが(「神魂命」の記事は島根半島地域に集中する)、そうした地域の神格から飛躍した次元で、『古事記』の体系をなう神産巢日神は成立している。〔神野志隆光〕

【参考文献】倉塚睡子『出雲神話圏とカミムスビの神』(日本文学研究資料叢書『日本神話』昭和45年)。○神野志隆光『ムスビの神の姿容』(講座日本文学『神話』上)、『国文学解釈と鑑賞』(別冊)昭和52年。

冠独步行(かむかぢ) 一冊。雑俳。松淵喜至共編。序(無記名)によると、元禄十五年(一七〇三)江戸和泉屋三郎兵衛刊。原題簽を有する元禄版は未見。内題「冠独步行」。なお、序には「懷冠付独り步行」とあり、これ

が書名であれば「冠付」なる名称が作品を伴つて用いられたのは本書が最初である。あるいは初版外題は「独步行」とあつたか。【内容】江戸で企画刊行された小本雑俳集の最初。露月・一調・東格・好柳・竹翁・風子・彩象・志琴・一銅・舟山・立和・路水・素桐・扇山・酔月・一有・曲水・雷雨・露水・古竹の二十名の、多くは調和・不角系の点者による笠付句集。【諸本】宝水年間(七〇一七)に版元が万屋清兵衛に移り、爾後同六年、享保五年(一七三〇)、同八年などの諸版あり、享保八年版は題簽に「俳諧ひとりあるき」とあり、点者名を削る。【翻刻】徳川文芸類聚11。〔大谷篤蔵〕

【参考文献】倉塚睡子『出雲神話圏とカミムスビの神』(日本文学研究資料叢書『日本神話』昭和45年)。○神野志隆光『ムスビの神の姿容』(講座日本文学『神話』上)、『国文学解釈と鑑賞』(別冊)昭和52年。

龜井經学叢書(かめいしろう) 七十四冊。叢書。真軒三宅小太郎(一八五二-一九〇四)が蒐集した龜井南冥・龜井昭陽父子の著書(主に写本)十五点を集成したもの。無窮会真軒文庫蔵。【内容】南冥の『論語語由』(版本)、『春秋左伝考義』(経伝要旨)、昭陽の『周易備考』(未定稿)、『大学考』、『中庸考』(版本)、『尚書考』、『毛詩考』、『礼記抄説』、『左伝續考』、『語由述志』、『孟子考』、『孝経考』、『古序翼』(国語考)から成る。全冊朱点書入れがある。南冥・昭陽父子二代にわたつて築かれた経学の根幹をなす四書・五経および『孝経』の各経に関する論考・注釈を一通り揃えてゐるところに特色がある。【付記】なお、松永安左衛門・安川寛・龜井英子旧蔵の南冥・昭陽の自筆稿本と一門の手に成る精写本三七〇冊を集成した「龜井家学文庫」が慶応義塾大学斯道文庫に所蔵されている。〔梅谷文夫〕

龜井昭陽(かめいしろう) 江戸時代の儒学者。

【参考文献】土居光知『原始的言語と物真似』(『文学序説』昭和2年)。○折口信夫『天語と卜部祭文との繋り』(翁の発生(折口信夫全集1・2、昭和29年)。○青木紀元『日本神話の周辺』(『日本神話の基礎的研究』昭和45年)。○土橋寛『海人駆使』について、『神語』歌の

名は昱、字は元鳳、通称は昱太郎。昭陽は号。別に空石・月窟・天山遜者など。筑前の人、南冥の嫡男。天保七年(一八三六)五月十七日没、六十四歳(万曆家内年鑑書込み年譜)。**【事蹟】**幼少より父の薫陶を受け、寛政三年(一七九二)十九歳、山陽道に遊び、徳山で島田藍泉(南冥の友人)より詩文の作法を教わって帰国、この年、経世論たる『成国治要』を著した。翌年南冥廃黜のため、福岡藩の十五人扶持儒官として家督相続、家塾の経営にあたる。同十年、甘棠館焼失、儒職を免ぜられ、下士待遇となる。文化三年(一八〇三)三十四歳、秋月藩主黒田長舒に従って江戸に行き、翌年帰国。同六年より翌年にかけて、烽火輪番に服務、この十度にわたる山上の体験を『烽火日記』三巻にまとめた。文化九年芸州に遊ぶが、以後は家にあつて著述と育英にはげみ、家学を完成する。その間、文政元年(一八二〇)には頼山陽が、同七年には僧一圭(遠山荷塘)が来訪し、一圭の所望に応じて『家学小言』を執筆した。**【著作】**昭陽は当代随一の経学者として、多彩な著作を残した。上記のほか、経書関係では『毛詩考』『尚書考』『周易備考』『礼記抄説』『左伝攷考』『孝経考』『語由述志』『孟子考』『大学考』『中庸考』などがあり、その他、『老子考』『莊子瑣説』『国語考』『説弁道』、および『榷文談』『榷文絮談』(この二書は『徂徠集』を批評したもの)、『蒙史』(日本古代史観)、『空石(一)日記』、『傷逝録』(末子修三郎の夭折を傷むの記)があり、『昭陽先生詩文集』も存する(以上ほとんど『龜井南冥昭陽全集』に所収)。(因園)七三(一八三六)

〔荒木見悟〕

龜井南冥 江戶時代の漢学者。

名は魯、字は道載(道哉とも)、通称は主水。南冥は号。寛保三年(一七五三)筑前早良郡姪浜村に医師藤因の嫡男として生まれ、文化十一年(一八三三)三月二日没、年七十二(年譜)。**【事蹟】**宝暦六年(一七五六)十四歳、肥前蓮池の僧大潮について詩文の作法を学び、二十歳、大阪に遊び、永富独嘯庵に師事、古医方を学んで帰る。同十二年(二十一歳)、朝鮮信使が来朝し筑前藍島に寄泊した際、その随員と詩文の応酬を重ね、文才を世に知られる。翌年、父とともに居を福岡府下に移し、医業のかたわら、私塾蜚英館を開く。三十三歳、薩摩に遊び、その往返の見聞を『南游紀行』にまとめる。三十六歳、藩費教官に抜擢され、六年後、藩校甘棠館の落成にともない、その祭酒に任ぜられた。この頃が南冥生涯の絶頂期にあたるが、徂徠学を奉ずる南冥と、朱子学を奉ずる修猷館一派との軋轢がたえず、その豪放な性格への反撥も加わり、寛政異学の禁を契機として、寛政四年(一八二二)ついに廃黜された。時に五十歳。翌年、『論語語由』二十巻を完成、文化三年(一八〇三)秋月藩主黒田長舒の手で出版された。その学塾は、嫡男昭陽によって維持されるが、藩当局の監視がきびしく、往年の隆盛を回復することはできなかつた。**【学風】**南冥は、徂徠学派がやや低調期に入った頃、その学風を西海に発揚した第一人者であり、その才気は関西の文壇を圧倒した。他面、経学、殊に『論語』春秋の注解には熱意を傾け、徂徠学を墨守せず、朱子学や仁斎学等からも取るべきは取るという折衷的態度を持した。その学風については、昭陽の『家学小言』に詳らかである。門下から広瀬淡窓はじめ、幾多の英才が輩出し、また志賀島出

土の金印をいち早く漢土伝来と認定するほどの見識をもっていた。詩文もまたたくみであった。**【著作】**上記のほか、『春秋左伝考義』二巻、『肥後物語』一卷、『半夜話』一卷、『南冥問答』二巻(安永九年刊、医学に関するもの)、『古今齋以呂波歌』一卷(天保十年刊)、『決決余響』一卷、『金印弁』などがあり、詩文には、『我昔(がせ)詩集』、後人が編した『南冥先生詩文集』がある(以上ほとんど『龜井南冥昭陽全集』に所収)。(因園)七三(一八三六) 〔荒木見悟〕

〔参考文献〕高野江鼎湖『儒俠龜井南冥』大正二年。○荒木見悟『龜井南冥と役藍泉』(徳山市立図書館叢書)昭和38年。

龜井南冥 江戶時代の漢学者。

生の前は、亡夫妾腹の子豊若に対面する。園生の前から一部始終を聞いた豊若は親の敵を討ちたいと言いつ出すが、長明は仏門に入ることをすすめる。折から武継の追手が来て、再び園生の前を奪い去る。五段目ー長明は豊若・虎王を伴って鎌倉へ下り、執権義時に事の次第を申し出る。実朝の御前で長明と武継は対決し、武継は抗弁するが虎王と園生の前証言によって悪事は明白となり、首をはねられる。**【趣向】**鴨長明の妹園生の前を主軸にして、古浄瑠璃風の妻女横領によるお家騒動物の形式をとっている。なかならず、四段目では『方丈記』の詞章をそのまま使用している。このような古典利用の方法は加賀掾正本『つれづれ草』と同工である。**【諸本】**天和三年正月山本九兵衛版は八行四十五丁半本(写本で現存する)。加賀掾段物集『翁竹(九曲巻)』に鴨長明方丈記之唐榮を収載。『紫竹集』第四の『源氏三代記』そのふのまへ道行は本曲三段目末の道行と同文。**【翻刻】**近松全集1。(鳥居フミ子)

〔参考文献〕近松全集1。(鳥居フミ子)

龜田鵬齋 江戶時代の儒学者。

名は翼、のち長興。字に因南、公竜、稱竜がある。幼名弥吉、通称は文左衛門。鵬齋と号する。父方右衛門は、日本橋横山町にあった長門屋という籠甲商の通い番頭。宝暦二年(一七五二)九月十五日に江戸に生まれ、文政九年(一八二七)三月九日に没、七十五歳。亀田三先生伝実私記)。**【事蹟】**長じて井上金峨について儒学を学んだ。获生徂徠の学統をつぐ金峨は、徂徠の古学と中国の宋学を自らの見識によって理解する、折衷派といわれる学問を主張した。金峨の門人である山本北山が『作詩志毅』『作文志毅』をもつ

・和歌。〔安井久善〕

賀茂か 謡曲。協能物。夢幻能。五流現行曲。作者未詳。『能本作者註文』では金春禪竹作とし、「矢立加茂、但奥ハ宝生大夫作」と注する。「加茂」とも。〔梗概〕

播州室むろの明神の神主ワキが京の賀茂社に参り、賀茂川の水汲女前シテ・前シテから丹塗矢伝説の賀茂縁起を聞く（前場）。やがて天女の姿の御祖後シテの神後シテと別雷の神後シテがあらわれ、雨を降らせて五穀豊作を導く祝言の舞をまう（後場）。【素材・趣向】雨を降らせる雷神信仰を中心に、『日本書紀』などにみえる丹塗矢伝説をとりあげ、賀茂神社の神徳奉賛能に仕立てたもの。農耕の祝言能であるから古く田楽能として賀茂祭に上演されていたのを、のち金春系の能役者が改作したらしい。問（ハ）狂言（ハ）御田（ハ）は本狂言（ハ）田植（ハ）としても演ずる。【翻刻】日本古典文学全集（ハ）謡曲大観（ハ）。日本名著全集（ハ）謡曲三百五十番集（ハ）。謡曲大観（ハ）。〔金井清光〕

【参考文献】金井清光「作品研究 賀茂（能の研究）昭和44年」。

蒲生氏郷記うぶしうぢのき 一巻。軍記。満田出雲守作。寛永（ハ）六（ハ）六（ハ）後期成立か。永祿十一年（ハ）（英ハ）信長のもとに出仕、以後天正十九年（ハ）（五ハ）九（ハ）戸氏の反乱を鎮定するまでの、氏郷文録四年（ハ）（五五）没）一代の武功を記す。改定史籍集覧所収「蒲生氏郷記」（伴信友の識語あり）に、小瀬甫庵の所望で満田出雲守（信友によると元和（ハ）六（ハ）五（ハ）三（ハ）四）ごろ会津町奉行。同系の内閣文庫蔵本の序にも作者というが述作、のち伊勢の神戸道門が加筆した、と成立事情を語る。これ

人。『統古今和歌集』完成直前の盛儀で、同集に十数首人集したが、右方は関白実経邸

で、左方は院の御前でそれぞれ歌を評定して会に臨んだという（増鏡第七北野の雪）。左方光俊、右方為家の二人の判詞を通して当座における激しい論難応酬の様子が窺えており、幽玄の問題など歌論史の資料としても重視される。総じて光俊の判詞の方が詳細かつ強引であり、歌合の場においても傍若無人であったと伝えられる（井蛙抄）。【諸本】伝本は宮内庁書陵部・三手文庫・岡山大学池田家文庫・島原松平文庫など。【翻刻】群書類従・和歌。〔佐藤恒雄〕

龜山殿七百首かめやまのどのしちひゃくしゅ 一巻または三巻。和歌。鎌倉時代の定数歌。後宇多院二条為世・同為藤原詠。元亨三年（ハ）（三三）七月七日成る。龜山殿は後宇多院の仙洞御所で、同院の主催と考えられる。【内容】春秋各百三十首、夏・冬各百首、恋・雑各百二十首。作者は右のほか、小倉実教・同公雄（頓覚）二条為定・同為明・同為冬・惟宗光吉・道我ら二十四人。探題方式によつたため各人の詠歌数は不定。院九十六首、為世八十首、為藤六十八首などが群をぬいている。末尾に光吉の跋文があり、成立の経緯および加点的事情などが知られる。当時皇統は大覚寺・持明院の二統にわかれ、歌道の家は二条家は大覚寺統に、京極家・冷泉家は持明院統に近かった。この催しは大覚寺統および二条家によるもの。為世と対立した京極為兼は失脚しており、二条派の歌壇における主導的な立場が確立していた。【諸本】宮内庁書陵部本・神宮文庫本などがある。『百首部類』所収。【翻刻】群書類従

五月二十七日誕生。嘉元三年（ハ）（三三）五月十五日没、五十七歳。陵墓は京都にある龜山陵。【事蹟】正元元年（ハ）（三五）十一月踐祚、文永十一年（ハ）（三三）皇太子の後宇多天皇に譲位後、弘安十年（ハ）（三三）まで十三年間院政を行った。その皇統を大覚寺統と呼ぶ。正応二年（ハ）（三三）落飾、同四年禅林寺の離宮を禅寺として南禅寺の発祥となった。その主催する歌会や歌合は、弘長（ハ）（三三）二（ハ）三（ハ）（ハ）ころから徐々に増えているが、その文芸活動の中心は、後嵯峨院亡きあとの文永末年から建治・弘安年間にあると認められる。建治二年（ハ）（三三）には藤原為氏に『統拾遺和歌集』の撰進を命じ、弘安元年にはそのための『弘安百首』を召し、同年末に完成をみた。『嘉元仙洞御百首』の作者の一人。『統古今集』に十一首以下、勅撰集に計一〇六首入集した。家集に『龜山院御集』（桂宮本叢書20、私家集大成・中世II所収）がある。後嵯峨院は後深草院よりも才気煥発な龜山院を愛していたので、後嵯峨院の崩後その遺詔をめぐって係争が起り、大覚寺統・持明院統両統送立という事態が生じた。〔佐藤恒雄〕

龜山殿五首歌合かめやまのどのごしゅのかあひ 一冊。和歌。鎌倉時代の歌合。後嵯峨院（女房）藤原実経ら詠、衆議判、藤原為家（融覚）同光俊・真観判詞。別称「龜山院歌合」（仙洞五首歌合）二十番歌合など。文永二年（ハ）（三五）九月十三夜、後嵯峨院が龜山殿において催した。【内容】歌題は、河月・野鹿・山紅葉・不逢恋・絶恋の五題、五十番から成る。作者は前記四名の他、藤原基平・源資平・後嵯峨院中納言・光俊女・藤原実雄・源雅忠・藤原行家・同為教・小倉公雄ら計二十

て古文辞を批判したのに呼応するように、鵬斎は安永八年（ハ）（七五）『論語撮解』を著し、大いに徂徠攻撃の挙に出た。青柳東里は、『江戸の文風これが為に一変す』統諸家人物志』と評している。天明元年（ハ）（天）国政建て直しの建白書『富国雜議』を草したが、容れられず、やがて寛政の改革を迎えることになり、鵬斎は異学者の一人と見られた。寛政九年（ハ）（七五）春、駿河台の家塾染群堂を閉じた鵬斎は、本所から根岸へと居を移し、享和元年（ハ）（八〇）には下谷金杉中村へ移り、自らも「懶惰疎放故無匹、風韻閑東称第一」と詠じ、世間からも「金杉の酔先生」と言われる生涯を送った。鵬斎はたびたび遠近の旅に出た。寛政十一年の関西、文化四年（ハ）（八〇）の利根川流域、文化六年四月江戸を立ち上野・下野・越後・佐渡と、文化八年十二月まで二年八か月の大旅行もある。風流韻事を事とし、晩年には、唐の懐素風の草書、顔真卿・歐陽詢の書を消化したとみられる楷書、文人画をかきのこしている。【著作】前述の他に、『鵬斎先生詩鈔』（文政五年刊）、『鵬斎先生文鈔』（文政九年刊）をはじめ、『大学私衡』（寛政十一年跋刊）、『東西周考』（文政十一年刊）、画譜『胸中山』（文化十三年刊）、書譜『醉銘帖』（天保四年（ハ）（三三）刊）などがある。〔中村英治〕

【参考文献】中島撫山「龜田三先生伝実私記」（中村光夫ほか編『中島敦研究』昭和53年）。○中村英治「龜田鵬斎」昭和53年。

龜山天皇かめやまてんのう 鎌倉時代の天皇。諱は恒仁。法名、金剛源。後嵯峨天皇の第三皇子。母は西園寺実氏（ハ）の女（ハ）（大）官院。宗尊親王・後深草天皇の弟。建長元年（ハ）（二四

）

も同系の群書類従・合戦部所収『蒲生氏郷記』は右の記事と序を欠く。群書類従本は、史籍集覧本にくらべ、氏郷の功績を強調する傾向がある。【類書】氏郷関係の軍記として、他に『氏郷記』(三巻。神戸正望作。寛永十年(一六三三)成立。改定史籍集覧・日本歴史文庫所収。氏郷の孫、忠知が寛永四年、伊予松山へ入部するまでを記す。家臣の言動も詳述し、戦国の雰囲気をよく伝えて興味ある作品である)や『蒲生軍記』(六巻。元禄八年(一六九三)刊)などがある。

〔笹川祥生〕

蒲生君平(ごんへい) 江戸時代の儒学者。名秀実、通称伊三郎、字君蔵・君平。江戸住居を修静庵と称した。本姓福田であったが、五代の祖が蒲生氏郷の支族であることを知り蒲生姓に改めた。明和五年(一七六六)下野国宇都宮の油商又右衛門正栄の四男として生まれ、文化十年(一八三三)七月五日に没、四十六歳(墓誌)。墓は東京谷中の臨江寺。【事蹟】十四歳のとき下野国鹿沼の鈴木橋に国史・古典を学び、同国黒羽藩の鈴木武助に師事。天明五年(一八二五)水戸を訪れ、以来藤田幽谷はじめ水戸学者と交わり影響を受けた。ロシアが北方に出没するや、海防を説き陸奥を巡視。また時弊を論じ、さらに歴代天皇陵の荒廃を嘆き御陵を踏査し、しばしば京都・摂津・河内などを訪れ、帰途伊勢に本居宣長をたずね、佐渡の順徳陵に詣でた。儒者・故実家の業績のほか、尊王攘夷運動家として評価される。【著作】『今書』(二巻。寛政四年)、『山陵志』(二巻。文化五年)、『職官志』七巻、『不恤緯』一卷、『皇和表忠録』など。『蒲生君平全集』(一卷。明治44年)がある。〔国〕天八一八三

〔萩原 進〕

【参考文献】高浜二郎『蒲生君平』大正7年。○同『蒲生君平遺稿拾遺』昭和37年。○武田勘治『蒲生君平』昭和17年。

蒲生貞秀(たけひで) 室町時代の歌人。法名、智閑。近江蒲生郡の豪族。秀綱の男。系凶に「実和田秀憲之子也」とある。妻は大蔵卿頭長の女。藤兵衛尉、刑部大輔。永正十一年(一五四三)三月五日没、七十一歳。一説に八十六歳。【事蹟】宗祇と親しく度々連歌会に招き、連歌詞注『分葉(分)』を贈られ、古今伝授を受け、歌書も贈られたらしい。『新撰菟玖波集』に五句入集。三条西実隆と親交し、毎月二十日に月次会を催した。雅親以下の飛鳥井家の人々とも親しく、『雅後百首』を雅綱から贈られた。家集『蒲生智閑和歌集』三巻(私家集大成・中世IV所収)があり、「春日山はるの日影の四方にみつけふこそ千世のはじめなりけれ」以下、四季恋雑に部立され八四九首を収める。その他、自筆詠草懐紙四十八首をはじめ自筆の短冊、懐紙が伝えられる。『貞秀朝臣集』(私家集大成・中世V所収)は別人の集。

〔米原正義〕
【参考文献】稲田利徳『蒲生智閑の newly 資料』(岡山大学教育学部研究集録)53、昭和55年1月。

賀茂翁家集(かもちゆうけあひ) 五巻。和歌、和文。賀茂真淵作。村田春海編。文化三年(一八二六)江戸堀野屋仁兵衛ら三肆刊。【成立事情】刊本の冒頭に、「享和元年(一八〇一)十月の加藤千蔭の序、寛政三年(一七九二)十一月の春海の例言がある。千蔭・春海ともに真淵の門下で、春海が千蔭らの協力を得て編纂したものであることがわかる。春海の「例言」によると、「すべて十巻」とあり、内容は予定より半減したことになるが、これは版木の焼失したためという。即ち、真淵は早い頃の草稿は未熟だとして焼捨て、中頃より以後のは火事で焼けてしまったので、春海が門下や知友の間に残されていたものをおかき集めた、とある。なお、長歌や文章の万葉仮名で書かれているものについては、仮名に書き改めている。【内容】真淵の和歌と文章を集めたもので、巻一・二は歌集、巻三・四は雑文、巻五は紀行を収める。巻一・二の歌集は分類体に編成され、部類内では成立年月の順も考慮されている。短歌を主とするが、長歌も相当に見られる。巻三は「雑文」で、著作の序跋の類、巻四は「雑文」で、歌序・祝詞・弔辞・随想・記事の類。巻五の紀行は、『旅のなぐさ』(西帰)、岡部日記(東帰)、『後の岡部の日記』の三編を収めている。【意義】真淵の歌文集は種々出来ているが、本書は代表的なものである。真淵の思想・学問を考察する資料としても貴重な意義をもつ。真淵の主張を反映して、擬古的な傾向が目立つが、創造的な情熱も感じさせる。【諸本】「能古里具佐」(渠居翁遺草)等の名で伝わる『賀茂翁遺草』(の)は『賀茂翁家集』の稿本と思われるが、学習院大学図書館所蔵『賀茂翁遺草』は完本らしく、二十巻十冊から成る。内容は、巻一・八「和歌部」三冊、巻九・十四「雑文」三冊、巻十五「紀行」一冊、巻十六「丹比真奈備」巻十七「消息」二冊、巻十八「山里記」巻十九「雑考」一冊、巻二十「紀行」一冊の構成となっている。春海が「十巻」と言っているのは、「十冊」の意味と思われ、新編成にあたり組織を改めたこと

【参考文献】田林義信『賀茂真淵歌集の研究』昭和41年。○井上豊賀茂真淵の業績と門流』昭和41年。○丸山季夫『国文学史上の人々』昭和54年。

思われる(十巻と拾遺一巻を予定していたらしく、『国書解題』に紹介されているのは、新編成本『賀茂翁遺草』の端本と思われる)。「賀茂翁家集」の類書としては、『鴨真淵集』(岡部家文)、「渠主雑著」等があり、関係書として、文政九年(一八二六)伴直方編『天保四年(一八三三)石川依平編の『賀茂翁家集拾遺』等もある。文化三年刊の本書は整版本で、同十四年に再刻、天保十年刊『袖中渠居家集』、嘉永三年刊『掌中加茂翁家集』等も出、刊年不明のものもある。整版本とは別に、木活字本があるが、刊年不明。文化三年版については、春海が同五年に『賀茂翁家集版本正誤』を出しているが、木活字本には別種の正誤表が添えてある。【翻刻】増訂賀茂真淵全集12(文化三年版に拠る)。(井上 豊)

鴨川集(かみがわあひ) 五編十冊。和歌。長沢伴雄編。別称類題和歌鴨川集。類題鴨川集。二和歌鴨川集。編輯出版年次は、太郎集(第一編)が嘉永元年(一八二〇)、次郎集(第二編)が同二年、三郎集(第三編)が同四年、四郎集(第四編)が同五年で、五郎集(第五編)は伴雄失脚後の同七年である。【内容】加納諸平の「類題和歌集」は、地方歌人を育成し、地方歌壇の形成を促進させて成功裏に刊行されつつあったが、本書も同様の目的で当代の諸名家および新進作家の詠歌を、四季・恋・雑の部立のもとに各歌題ごとに分類して撰修し、逐次刊行したもので、総歌数八三二九首を収録した一大類題

【参考文献】田林義信『賀茂真淵歌集の研究』昭和41年。○井上豊賀茂真淵の業績と門流』昭和41年。○丸山季夫『国文学史上の人々』昭和54年。